

魔女の宅急便 作 角野栄子

あらすじ

母親が魔女、父親が普通の人間、二人の間に生まれたキキは、魔女として生きていくと決心し、**13 歳**の満月の夜に独り立ちの旅に出る。ただ一つ使える魔法、ほうきで空を飛べるということを活かし、空飛ぶ「宅急便屋さん」を始めたキキ。下宿先のパン屋のおかみさんのおソノさん、魔女の研究をする不思議なことが大好きな少年とんぼなど、さまざまな人と出会いながら、魔女として、人間として、少しずつ成長していく。

考察

本作において魔女がどのような存在であるのか、今回はそれについて考察したいと思う。単刀直入に言えば、本作において魔女は「異質な存在」なのである。実際主人公であるキキは、魔女の母親と普通の人間の父親の間に生まれたが **10 歳**になる頃には、これから魔法を捨て「普通の人間」として生きるか「魔女」として生きるかを、決めることができるた。「魔女」として生きていくなら、母親から魔法を教えてもらい、**13 歳**の満月のよる、独り立ちに備えて準備を進めていく。

魔女が「異質」であることから、己の身に不自由が無いよう、どちらで生きていくかの選択肢が早い段階から与えられているのではないかと思った。

また、キキが「魔女」として生きていくことを決め独り立ちの街として選んだコリコの街では、降り立った当初、街の人から冷たい扱いを受けた。生まれ故郷の町とは全く違う対応に、キキは衝撃を受ける。やはりここでも魔女は自分たちとは違う、「異質な存在」なのである。

降り立った当初こそ冷たい扱いだったが、偶然見つけた下宿先として受け入れてもらった、パン屋のおソノさんの助言もあり、キキが唯一使える魔法、空を飛べるところを生かして「魔女の宅急便」を始めた。最初こそ受け入れられなかったが、徐々に依頼が入るようになり、街の人々も「魔女」という存在を身近に感じるようになる。

以上のことからキキを通して、魔女という本来「異質な存在」であつたはずのものが「身近な存在」へと変化したのだと考える。

ラズライト

静かな魔女 作 市川朔久子

あらすじ

主人公の瀬尾草子は、不登校の生徒だ。草子は、周囲の人から「フトウコウ」だと冷たい目で見ている。そんな中、図書館で働く深津さんに出会う。草子は、常に優しく接してくれる深津さんのことをうれしくおもっていた。そんなある日、深津さんに〈しずかな子は、魔女に向いてる〉という言葉をお守りとしてもらった。草子は、その言葉をなにかの本の一節だと思い、レファレンスを希望する。やがて、深津さんから白い紙の束を渡された。それには、ふたりの少女のひと夏の物語が綴られていた。その物語の主人公、深山野枝は夏休みのある日、早川ひかりという女の子に出会った。ひかりは野枝に「〈しずかな子は魔女に向いてる。〉」という。それから二人はユキノさん（ひかりの親族）に「魔女になるためには、よく見て、そして考えることが大事」という趣旨のことを言われ、物事を色々な面から捉えようと奮闘する。しかしある日ひかりの両親が離婚し、野枝はもうひかりに会えなくなってしまう。

考察

私がこの物語で思ったことは、なぜ深津さんは草子に「〈しずかな子は、魔女に向いてる。〉」という言葉を送ったのかということです。私は、深津さんはひかりと出会いたての頃の野枝（自分）と草子を重ねているのだと思う。なぜなら、クラスメートの冷たい視線を辛く感じ不登校になっている草子に、ひかりに嫌われたくない一心ですぐに「ごめんなさい」と謝ってばかりいた自分を投影しているように思えたからだ。

また、私はタイトルになっている「しずかな魔女」の意味について考えた。「しずかな魔女」こと深津さん（野枝）は、ひかりの両親にひかりとの思い出を綴った手紙を書き、ひかりと再会することが出来た。また、草子に関しても自らの思い出を書いた物語を渡し、自分の思いを周りに伝える勇気を与えた。作者は、深津さんのように周りを勇気づけられる大人なって欲しいという思い、この児童書を書いたのではないだろうか。私は、この作品により、笑顔で毎日を過ごせる人が増えるといいと思った。

メリー

魔力の胎動 作 東野圭吾

あらすじ

鍼灸師をしている工藤ナユタは、ある時、ものごとを予測できる少女、羽原円華と出会う。職業柄、身体に若干の不調を抱えている患者と触れ合うことの多いナユタは、その少しの身体の不調の理由である、患者の大きな心の傷に気付くこともあった。

円華は様々な経緯で出会ったナユタの患者たちを自らの力と言葉で救おうとする。ナユタは彼女の紛れもない不思議な力に戸惑いながらも彼女を信頼し、彼もまた患者を救うために奔走する。

常人と能力が違う故に他人にあまり興味がなく、とにかく無愛想な彼女。そんな彼女が彼らを救おうとする「本当の」理由とは一体何なのか。

その先に見える彼女のひとつの想いとは。

「ラプラスの魔女」の奮闘を描いた、心温まるミステリー。

考察

この小説の中では、実は円華が「魔女」であるという明確な記述はない。

記述があるのは前作「ラプラスの魔女」だがそこから彼女が不思議な力を持っていて、その力により彼女が俗に言う魔女である、と解釈して考察しようと思う。

これはれっきとした現実世界のミステリーで、空想世界での出来事ではない。

彼女の力は、言ってしまうえば物理現象の予測だ。頭の回転が恐ろしく早く、現象が完了する前にその結果が分かってしまうため、予知能力や、それを見越して行動することによりものを思い通りに動かせる力を持っているように見えるのである。

彼女はその力を使い人々の心を救っていく。

私の考察内容は、羽原円華の行動理由について。作品中で理由は語られているが、そこから更に深掘りしようと思う。

彼女は「後天的な天才」だ。詳しくはシリーズを読んでもらうとして、彼女は望んでこの能力を手に入れた。

理由は人助けだ、と彼女自身が言っている。彼女は竜巻で母親を亡くしている。そういう自然現象で人の命が失われることの無いよう、彼女はラプラスの魔女となることを選んだのだと思う。

だが、途中で彼女の考え方は変わっていったのでは無いかと私は考えるのだ。

今作では、そんな自然環境で命を奪われる危険に迫られている人は一人もいない。

この作品では、彼女は自らの力を使い人々の「心」を救ってみせる。

手口は鮮やかとは言えないものもあるが、それでも彼女は人々に手を差し伸べる。

彼女の行動理由は、「自分にしかできない方法で人を助けること」だ。

この力を手に入れたことで、彼女は色々と苦悩したのだろう。だが、その苦悩に自分で決着を付け、自分の生き方を確固たるものとして決めた彼女は本当に強い。

「後天的な天才」となることを決めた強い少女は、その後も強くあり続けたのだ。

蒼

魔女たちは眠りを守る 作 村山早紀

あらすじ

この物語は、古い港町を舞台に赤毛の長い髪で金色の瞳を持つ魔女の七瀬とその町の悩みを抱えた住人との物語である。明日を迎える事を拒んでいたり、心に傷を抱えていたり様々であるが、ナナセとの関わりにて生きる希望や生きる意味を見出すようになる。ナナセは、街の人との関わりを通して自分も大切なものに気づいていく。どの悩める人々も多種多様な目標を少なからず持っている。彼、彼女らに刺激を受けながらナナセもほっと安らぐ「魔女の家」を作る事を目指すのだった。

考察

ナナセは、魔女ゆえに歳を取るのは非常にゆっくりである。文章中より、外見は十代後半から二十代後半と示されている。しかし、十年に一回しか歳を取らないようだ。そんな長い年月を生きる魔女たちは、沢山の街を転々としながら人々に紛れて暮らしている。そんな魔女たちは、私達人間のように別れを惜しまれることはない。誰かに看取られる事なくずっと消えてしまい、記憶からも消し去られてしまう。それは、人間も一緒である。しかし、このナナセや魔女らの憧れであるニコラは永遠だと語る。きちんと覚えておけば自分とその人たちが生きた証を証明できるという。

それを踏まえ、文章中の「きっと永遠なの。魂も大好きだって思いも」という部分を見てみると実に今の社会を写しているように思える。今の社会、災害や不幸な歴史により無惨に一生を終えるような人を忘れがちになってしまうが、誰かがそれらの人に想いを馳せることが魔法を持たない私達の『魔法』になるのではないかと思える。懸命に生きる中で、私達も時に悩み挫折することもあるだろう。

だが、誰かしら思ってくれている人はいるのだ。誰かが思いを馳せた時、私達は永遠となるのである。そんな事をした人々はきっと誰かの魔法使いであるのだ。誰かの思いを大切にし、誰かを愛する事はその人の鎮魂でもあるのではないかと思えるのだ。

そんな思いを守る魔女たちは、私達の生きた証を称え、祝福したいと思うような私達のせめてもの思いを具体化するような存在ではなかったのかと思える。そして、彼女たちもまた忘れ去られる存在である。だからこそ、彼女らが思ってくれているように私も彼女らにとつての魔法使いになりたい。そう思えた。

スノードロップ

白雪姫 作 グリム

あらすじ

白雪姫の義理の母の女王は魔法の鏡で自分よりも白雪姫が美しいと知る。女王は狩人に白雪姫を殺させようとした。狩人は白雪姫が哀れになり、女王が白雪姫を殺そうとしていることを言って逃す。逃げていると森の中に一軒の家を見つけた。疲れていたのそこにあったベッドで白雪姫は眠った。寝覚めると七人の小人がいて、これまでの事を話すとその家に居させてくれることになった。女王は魔法の鏡で白雪姫が生きていることを知り、女王だとばれなようにして毒りんごを白雪姫に渡し食べさせた。小人たちは山から帰ってくると白雪姫が倒れていた。どうやっても目を覚まさず、小人たちはガラスの棺桶に白雪姫を入れる。山の上に置き小人たちが悲しんでいると、丁度そこに王子が通りかかりその棺桶を小人たちはゆずった。王子の家来が棺桶を運ぶ時に、白雪姫ののどを詰まらせていた毒りんごのかけらが出て、白雪姫は目覚めた。

考察

毒りんごを白雪姫に食べさせる前を合わせてにも三度も女王は白雪姫を殺そうとしていた。一回目は白雪姫が首を紐で締められた。その時は、丁度小人たちが帰ってきて紐を取れたから助かった。白雪姫はそれから小人たち以外は家に入れないようにしていたが、女王は姿を変えて善良な人のふりをして白雪姫を殺そうとする。白雪姫は家を訪ねてくる人を善良な人だと疑わずにいて、三度も殺されかけた。このことから人は見た目によらなくて、善良に見えても知らない人を信じ過ぎてはいけない、悪い人は善良なふりをすることもある。このようなことをグリムは伝えたかったのではないだろうか。子供は留守番をしている時に来た人を疑わず扉を開けてしまうと思う。子供が来た大人を信じ過ぎて連れ去られる、そんなことがないようにこれを書いたのかもしれない。現代でもこの物語は子供に、留守番の時に知らない人が来ても扉を開けてはいけないという教訓を残していると私は思った。

冬苺

西の魔女が死んだ 作 梨木香歩

あらすじ

西の魔女が死んだ。そう母親に聞かされたまいは、西の魔女である『おばあちゃん』の家に向かう道中で、二年前に不登校の間祖母の家に滞在していた時のことを思い出していた。おばあちゃんとの穏やかで自然に囲まれた生活のこと、おばあちゃんの家近くに住むゲンジさんとの確執、それが原因でおばあちゃんと喧嘩してしまったこと、そしておばあちゃんから教えられた魔女修行のことを。

考察

今回考察するのは「魔女修行は何のためのものなのか」である。

根拠は二つある。一つ目は、魔女である『おばあちゃん』に自信満々という評価がまいとその母親から下されていることだ。そして、その後に「自分はいつも自信がない」という文章が続いている。見習い魔女であるまいは自信がなく、魔女の『おばあちゃん』は自信に満ちあふれている。この対比から、魔女修行の結果として自信が得られるのではないかと考えた。

二つ目は、魔女修行で行ったことを分析した結果である。

魔女修行で行ったことは二つのパターンに分けられる。「早寝早起きをすること」「自分が決めた目標を達成すること」と「自分で考えて決めること」「自分の直感を信じることは大切だが、それに囚われすぎてはいけないこと」「動揺しないように努めること」だ。前者は、後者に比べると今すぐできる即物的なものであり、達成もしやすい。達成感を得られたならば、それは自信へと繋がるだろう。ゆえに、前者は自信を生むためのものであると推測できる。後者は、前者で得られた自信をより確固たるものにするためのものだと考える。理由は後者三つは自信がないとできないことだからだ。自分に自信がないと自分の決断に不安が生じ、どうしても他人の意見に動揺したり流されたりする。だから、前者に比べ達成するのは難しいが、その分達成できた場合は自信が確固たるものとなるだろう。

これらのことから魔女修行は「自信をつけるため」とであると考えた。

群青色

メアリと魔女の花 作 メアリ・スチュアート 訳 越前敏哉、田中有紀

あらすじ

両親の都合で、夏休みの間赤い館村にある大お婆の家に預けられた主人公メアリ。

ある日、メアリは黒猫に連れられ森へ行くと、そこで七年に一度しか咲かない不思議な花《夜間飛行》を見つける。

それはかつて、魔女の国から盗み出された禁断の“魔女の花”だった。

一夜限りの不思議な力を手に入れたメアリは、雲の上にある魔法世界の最高学府“エンドア大学”への入学を許可されるが、メアリがついた嘘によって大学を巻き込んだ大事件を引き起こしてしまう。

魔女の花を追い求める、校長マダム・マンブルチューク。奇妙な実験を続ける、魔法科学者、ドクター・デイ。少年ピーターとの出会い。

小さな村に行ったことから始まる平凡なメアリの一夏の冒険ファンタジーだ。

考察

物語の中盤では、メアリはエンドア大学で檻に入れられた動物達を見つける。彼らは校長マダムと魔法科学者ドクター・デイの実験によって、魔法で姿・形を変えられてしまったのだ。メアリは彼らを元の姿に戻そうとする。

メアリは全ての魔法を解く呪文を唱えた。すると動きの鈍かったハリネズミが美しい鹿に変わったり、足を引きずっていたアリクイが鋭い翼を持ったツバメになった。

鹿やツバメやその他の沢山の動物達を引き連れエンドア大学を出るが、その事に気がついた校長マダムとドクター・デイがメアリを追いかけてきた。

魔法での攻防戦が繰り広げられる中、物語の終盤ではメアリが助けた動物達がメアリを囲んでマダムとドクター・デイから守ってくれた。

林の中を魔法のハウキで突っ走る中、沢山の小枝が、走る鹿のひづめの様に鳴り、その上空では、鳥達が鋭い声を上げながら宙返りをする。

メアリは無事家に帰る事ができ、冒険は終わった。

夏休みが終わり、学校の寮に入ったメアリは冬にその林へ行く事は滅多になく、その音を聞くこともない。それに、たとえ聞いたとしても、何の音だか、もう覚えていないだろう。

これで物語は終わっている。ここで私が気になったのが最後の、『もう覚えていないだろう』の部分だ。エンドア大学へ入学して、檻に入れられた動物達を発見し、助ける。これはたった**2**日間での出来事だった。メアリは無力な人間だから、もしメアリが魔法使いに捕まったら何をされるか分からない恐怖があったはずだ。しかし、メアリは小さな勇気を持って、立ち向かった。

メアリは平凡すぎる自分が嫌で、自分に自信を持つことはできなかったが、これらの出来事はメアリ自身を成長させた。自分にも何かできる事がある、と自分に自信がついたメアリには、もう魔法は必要なかったのではと思った。

ミトコンドリア

オズの魔法使い 作 ライマン・フランク・ボーム

あらすじ

アメリカのカンザス州で暮らす少女、ドロシーとその愛犬トトはある人竜巻によって家ごと不思議な「オズの国」に飛ばされてしまう。元の家に戻るため、ドロシーとトトはエメラルドの都にいるオズの元へと黄色いレンガの道を歩いていく。その道中で賢くなりたいカカシ、心が欲しいブリキの木こり、勇気が欲しいライオンと出会い共にエメラルドの都へと向かう。

エメラルドの都に着いた一行は、オズと謁見するも西の悪い魔女を殺せば全員の願いを叶えると言った。そして、一行は西の魔女の元へと向かった。

考察

私はオズの国はどこにあるのかということについて考察します。オズの国と現実を行き来した際の作品中の描写は、魔法などの超常現象的なものを除くと

- ・ドロシーはカンザス州から竜巻に乗って辿り着いている。
- ・オズは気球に乗って帰った。

という二つが挙げられます。

これらの描写から空を経由することで行き来が可能な場所だと考えられます。一般的な熱気球は高度およそ二万メートル以上の高度まで上がることが可能であるとされています。また、竜巻は直径数十メートルから大規模なものでは数百メートルから数千メートルほどの規模であるとされています。

これらのことから、オズの国は高度数千メートルほどの上空にあるという可能性と、高度数千メートルのところにワームホールのようなものが存在しそこを経由することで行くことが可能な別次元のエリアに存在する可能性の二つの可能性を考えました。

まずは、前者から考察していきます。高度数千メートルになんらかの陸地が広がっていると仮定した場合、その陸地が広がっているところの下に影が落ちるはずですがそのような描写はないです。光学迷彩等の技術を用いても影を無くすことは不可能であると考えられるのでこの線は薄いでしょう。

後者は、別次元にあるという説ですが私はこちらの説を有力視しています。その理由は、魔法のあるファンタジーな世界、つまり現実社会における一般常識が通用しないということは丸切り異なる世界だと考えられるからです。また、高度数千メートルのところは飛行機などの飛翔体は殆ど通過しないのでワームホールが発見されていなくてもおかしくはないと考えられるからです。

以上の理由から、私はオズの国は高度数千メートルのところにワームホールのようなものが存在しそこを経由することで行くことが可能な別次元のエリアに存在すると考えました。

そら